

リンドウのふる里

—エゾリンドウ、アケボノソウ、センブリ、フデリンドウ(リンドウ科)—

盛岡森林管理署 森林技術指導官 松尾 亨

半自然草地と呼ばれる二次草地が、ここ50年ほどで7割ほど減少しているそうです。かつては、高原で牛や馬が放牧され人為的に管理され保たれていましたが、放牧の減少から森林化が進み、シバ草地で成育する蝶や野鳥、植物も減少傾向にあります。今回はそんなシバ草地で見られるリンドウ達を紹介します。

エゾリンドウは高さ80cmほどで、花は9～10月頃頂部や葉の付け根に数段付け、青紫色で上向きに筒状に咲きます。花屋のリンドウはエゾリンドウの改良種が多い。

アケボノソウは湿地や林縁で見られ、高さが50～80cmに直立し白い5弁花を全開します。由来は、花弁の縁にある濃い紫の斑点を夜明けの星に見立て曙草。

センブリは高さ20cmほどで、晩夏に5弁で薄紫色の筋入の花を付けます。古くから胃腸薬として使われ、名の由来も千回振り出して煎じ

ても苦いことから、「いわてレッドデータブック」で存続基盤が脆弱なCランク。

フデリンドウは、シバ草地で見られ10cmほどと小さく、花は5月頃で5裂して副片のある薄紫の花を付けます。由来は花を筆の穂先に見立てたことから。

漢字で「竜胆^{りんどう}」と表し、根を薬用とし熊の胆より苦いことから竜を用いたと言われ民間薬としても古くから使われています。栽培は岩手が生産量日本で「サマースノー・安代のひとみ」など新品種もあり、贈答など新たな市場を広げています。

草原由来の植物は減少傾向で、オミナエシやオキナグサ等の植物を食草としている昆虫の減少も心配です。シバ草原を次代に繋げるためには、草地と森林、農業と林業のような一体的な営みが重要です。



エゾリンドウ



アケボノソウ



安比高原の放牧風景



センブリ



フデリンドウ